国際教育研究フォーラム

第 97 号

2023年 5月

国際教育研究所

| 百 次 | 頁 | 遠きところを近く見、近きところを遠く見る | 小山 悦司 | 1 | 大学生と高校生によるインドにおける国際教育プログラム実践 | 木村 光宏 2 ~ 11 | 岡山理科大学でのドイツ語教育を振り返って | 三木 恒治 12 ~ 16 | 編集後記 | 16

遠きところを近く見、近きところを遠く見る

国際教育研究所所長 小山 悦司

江戸時代前期の剣豪とされる宮本武蔵は、岡山県美作市(旧大原町)に生誕したとする説が有力である。彼の剣術や兵法の基礎となる心構えや視点などが、『五輪書』の中にまとめられている。その全5巻のひとつ「水之巻」には、万物の見方として「遠きところを近く見、近きところを遠く見る」との至言が記されている。一般的には、眼前の敵に目を奪われることなく、遠くの敵を間近に見るのが勘所であると、距離的・空間的な解釈がなされている。しかし、時間的な解釈として、遠い将来を間近なこととして真剣に考え、今を一歩離れて遠くから俯瞰的に捉えることの重要性を示唆しているともいえる。

人口問題は、武蔵の至言が当てはまる典型である。30年先や50年先の未来を本気で考えられる人は、いったいどれ程いるのだろうか。人口の変動は、統計学的にもかなり正確な予測が可能であり、現在起きつつある日本の人口減少問題は、かなり以前から指摘されてきていた。どうしても遠きところを遠く見ることになり、近視眼的な対応になりがちである。

厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所は、本年4月26日、2070年までの日本の将来推計人口を公表した。総人口は、20年の1億2615万人から70年には約3割減少し、8700万人となるいわゆる「50年後、人口3割減」問題である。出生数は70年に50万人となる。少子化を食い止め、社会の活力を維持する施策はもとより、現状の維持が厳しくなる先行きを直視し、「縮む日本」を前提とした社会や制度の再構築に向けた戦略を立てるべきである。

政府は「異次元の少子化対策」を実現させるために、こども未来戦略方針を 6 月 13 日に 閣議決定した。児童手当の拡充などが盛り込まれ、これから 6~7 年が「少子化傾向を反転できるかどうかのラストチャンス」との認識で、今後 3 年間を「集中取組期間」と位置づけた。その上で、今後 3 年間で取り組む具体的な政策を「加速化プラン」として取りまとめた。

こども未来戦略方針の策定に関連した参考事例として、出生率が2005年の1.41から2019年には2.95に上昇した岡山県奈義町が「奇跡の町」として知られている。町予算の15%を投じる「手厚い子育て支援」に20年かけて取り組んできた少子化対策の成果とされている。奈義町と武蔵の生家のある美作市は奇しくも隣接している。奈義町の事例が将来に向けた持続可能な取り組みとなることを、武蔵は400年の時空を超えて見守っているかもしれない。

大学生と高校生による インドにおける国際教育プログラム実践

岡山理科大学 学生支援機構 グローバルセンター IB 教員養成プログラム コーディネーター 木村 光宏

はじめに

国際バカロレア (以下: IB) とは越境して教育を受ける児童・生徒の教育の課題を解消するものとして、1968 年にヨーロッパを中心に導入された国際的な教育プログラム及び大学入学資格である (国際バカロレア機構、2014)。 現在、IB 認定校は 160 以上の国・地域で約 5500 校以上に及び、近年、日本でも注目を集めている(文部科学省、2023)。日本国内では、2013 年から日本語によるディプロマ・プログラム(Diploma Programme: 以下 DP)を開始し、IB の学校を 200 校にすることを目標に推進され(文部科学省、2023)、2023 年 3 月時点ではプログラムの数が 207 校となりその数が年々拡大していることが伺える。国際バカロレアはプライマリーイヤーズプログラム(Primary years programme: 以下 PYP)、ミドルイヤーズプログラム(Middle Years Programme: 以下 MYP)、ディプロマプログラム(Diploma Programme: 以下 DP)、キャリアリレイテッドプログラム(Career-related Programme: 以下 CP)の4 種類のプログラムを提供しており、それぞれ 3~12 歳 (PYP)、11~16 歳(MYP)、16~19 歳(DP)、16~19 歳(CP)の児童・生徒を対象にプログラムを提供している(文部科学省、2023)。また、高等教育では IB の教員養成の必要性から IB 教員資格(IB Educator Certificate: 以下 IBEC)を取得できるプログラムがあり、2023 年 現在 54 の大学でプログラムを提供している。

今回 2023 年 3 月 25 日から 4 月 2 日の 9 日間で、日本の IB 教員養成プログラムを履修する大学生と IB 認定校の高校生がインドの首都デリー郊外のグルガオンに位置する IB 認定校パスウェイズワールドスクール (以下パスウェイズ) を訪問し、現地の学生と交流しながら IB に関連する実践を行った。参加者は IB 教員養成プログラムを実施する岡山理科大学の IB 教員養成プログラムから 2 名の大学生と、IB 認定校である英数学館高等学校・大阪府立水都国際高等学校・さいたま市立大宮国際高等学校・神奈川県立横浜国際高等学校に加え国際協力に関心のある東京都立科学技術高等学校の生徒が参加した。今回の取り組みでは大学生とさまざまな学校の高校生が、IB または国際協力というキーワードでつながり、協働的にプログラムを実施する内容となった。本稿では、その取り組みの内容とその取り組みが大学生・高校生にとってどのような成長の機会となったかについて考察することを目的と

する。

1 プログラム概要とねらい

当プログラムは大学生と高校生が参加するため、NPO 法人 IMAGINUS(イマジナス)というインドを中心に国際協力・国際教育を行う広島の NGO の主催とし、旅行手配を HIS に依頼した。これまで、大学生も高校生も新型コロナウィルスの影響で海外で活動する機会が限られてきたので、海外で成長できる機会を提供するために実施した。これまで、研究活動を通してインドのパスウェイズとつながりができ、インドの学校からも交流や協働プログラムの要望があったため、企画の運びとなった。インドの学校の生徒は高校生であることから、日本側も高校生が良いと考え8名の高校生が参加することとなり、また大学生も英語による授業を IB 教員養成プログラムの実習とすることで参加した。インドの学生との交流や高校生・大学生の交流もあり、インドをフィールドとしてそれぞれが成長できるようにプログラム内容の検討を行った。

プログラムのねらいを大学生と高校生でそれぞれ以下のように設定した。

ねらい① (高校生):インドのトップ IB 認定校において授業を体験し、その学びの内実を体験しながら学ぶとともに、貧しい村の学校における国際協力プロジェクトを IB 認定校生徒と企画し実践する

ねらい② (大学生): IB 認定校において、英語による数学授業の計画・実践・振り返りを 行うことで、英語の力を伸ばすだけでなく、活動を効果的に取り入れた学びや生徒中心の展 開を意識した教育を実践し、IB の授業手法を学ぶ

インド渡航前には三回の全体ミーティングを行い、インドの文化や国際協力の状況を学んだ後に、最終的にはオンラインで国際協力プロジェクトについて議論を行った。大学生は個別で四回の打ち合わせを行い、英語による数学授業の開発及びリハーサルを繰り返して行った。

2 プログラムの概要

2. 1. 高校生の実施したプログラムの内容

インド渡航の内容を以下のとおり実施した。

インド IB 認定校のパスウェイズには 3 月 26 日(日)から 3 月 30 日(木)の 4 泊 5 日で滞在した。滞在の前後にはインドの文化を知るため、世界遺産を訪れインドについても知る機会を提供した。パスウェイズは寮生活をしながら学ぶことが可能な学校であり、学校内の

セキュリティについても安心して過ごすことができる施設である。パスウェイズでの内容について表 1 に示す。

丰 1	・パスウェ	イズでの活動概要	(出記:	第老作式)
14 L	・ハヘリエ	1 へ し V 八百里/11以(3)	(1117)1 .	= 1 P X

3月26日(日)	パスウェイズ到着	宿泊施設へ移動、ミーティング
3月27日(月)	午前:音楽、村の学校での活動	村の学校の壁をペイントする作業
	午後:英語、陶芸、ダンス	授業でディスカッション
	夜:ミーティング、自由時間	活動の振り返りを実施
3月28日 (火)	午前:村の学校での活動	民芸品やヘナ(伝統アート)などで
	午後:英語、演劇	交流
	夕方:インド伝統遊び体験	ボリウッド映画体験、英語プレゼン
		カバディ体験
3月29日 (水)	午前:村の学校でダンス交流	インド及び日本の伝統ダンス披露
	午後:クリエイティブ企画	キーホルダーなどの創作
	夜:天体観測	スポーツなどでも交流
3月30日(木)	午前:クロージングセレモニー	パスウェイズで学んだダンスなど
		を関係者に披露

【村の学校の訪問 (国際協力・国際交流)】

3月27日~29日の3日間で、パスウェイズの近くにある村の学校を訪問した。パスウェイズは比較的裕福な家庭の生徒が学んでいる一方で、村の学校は政府が設立した学校となっており机や椅子などの設備が十分に整備されていないという現状があり、村の学校の生徒は英語がほとんど話せずヒンディー語を主に話す。普段からパスウェイズの「創造性」「活動」

「奉仕」(Creativity, Activity and Service:以下 CAS)のプロジェクトで、手洗い場を設置したり、ソーラーパネルを設置したり、パソコン教室を整備したりなど、さまざまな支援が行われている。パスウェイズではこのように支援している学校が他にも複数あるという。

今回の訪問では学校の壁のメンテナンス作業(図1)を行うと同時に、日本との交流の証として壁にアートを残すという内容の国際協力を行った(図2)。



図1:壁のメンテナンス作業



図2:村の学校での壁のデザイン

また、国際交流としてはインドのヘナと呼ばれるアートを体験させてもらい、日本の文化 についても縄跳びを紹介するなど、さまざまな内容の文化交流を行った。最後にはお互いの 国の伝統ダンスを踊り、村の学校での交流を終えた。





図3:村の学校での国際交流

【パスウェイズでの授業における交流】

渡航前の学習で受けたい授業の希望を聞き、今回の渡航では英語、陶芸、ダンス、演劇、音楽の授業を体験した。英語授業は二回の構成で、初回は授業を受けディスカッションなどを通して英語を学び、二回目は自分たちが授業を企画して実施するというものだった。また、陶芸の授業ではそれぞれの生徒がデザインをして、創造的な活動に取り組んだ。



図4:英語授業でのディスカッション



図5: 陶芸授業での創作活動

【パスウェイズでの自由時間の交流】

パスウェイズの午後のプログラムの後、自由時間でもさまざまな交流が行われた。パスウェイズではサッカーやバレーボールなど日本でメジャーなスポーツだけでなく、クリケットのようなインドで人気のスポーツを生徒たちは楽しんでいた。また、スポーツだけでなく、インドでは伝統的な遊びであるカバディについても、インドの生徒や先生に教えてもらい、スポーツや伝統的な遊びを通して交流した。また、日本の浴衣の文化についてもインド人生

徒に体験してもらい、村の学校とは異なる文化交流を行った。







図7:浴衣を着て交流する学生

2. 2. 大学生の実施したプログラムの内容

数学の授業実践はパスウェイズ滞在 3 日目に実施された。打ち合わせとは異なることも 多く、さまざまなパターンを想定して授業準備を行った。

【数学授業の実践】

授業の内容は数学でも有名な「モンティ・ホール問題」という題材を扱い、実際の施行を 繰り返して実験する結果と、数学的に理論で求める結果がおおよそ一致することで、確率に 関する理解を深めるのがねらいである。授業までの準備は IB 教員養成プログラム担当教員 等と以下の内容で行った。

表 2: IBEC 学生による英語による数学授業実践に向けた準備

打入计

11 🗖 🕝		[] 台
1 月目	2/14(火) 1 時間	インドでの授業内容の検討
2 日目	2/21(火) 1時間30分	スライドの確認 (日本語版)、流れと活動の確認
3 日目	2/28(火) 1時間	スライドの確認(英語)、授業練習
4 日目	3/7 (火) 1 時間	スライドの確認(英語)、ワークシートの確認
5 日目	3/9(木) 1時間	英語資料と指示のネイティブチェック
6 日目	3/14(火) 1 時間	担当教員との最終調整
7 日目	3/24(木) 1時間	ピアティーチング
8月目	3/26(日) 1時間	前日準備

授業を実施した学生は大学受験で英語を使っておらず、英語の活用には苦手意識のある学生であったが、卒業後に英語を使う可能性があるため、英語の学習には非常に積極的である。また、数学の教員免許を目指す学生で、大学2年生からIB教員養成プログラムを履修し、IBの教育手法について学んでいる。1~4日目および6、8日目の準備については担当教員の



図8:大学生による英語による数学授業実践

研究室での個別指導による準備を行い、5日目の準備についてはネイティブ職員との打ち合わせによる準備を行い、6日目は学生が友人を集めて自主的に授業練習を行った。

3 生徒記述結果の考察

3. 1. 高校生の感じた成長や気づき

プログラムの実施後、すべての参加者に振り返りを記述式で回答させた。以下にその振り返りの記述で特徴的と思われる【言語的な側面の気づき】、【インドの人に対するイメージ】、 【パスウェイズに対するイメージ】の3つの観点から生徒の振り返り記述を抽出・考察を行った。

【言語的な側面の気づき】

言語的な側面に関する記述について、生徒 H は以下のように自身の言語に関する気づきを語った。

Pathways 3 日目に村の学校で靴下人形を作った時に手伝ってくれた子が、人形 2 つとお花とミサンガをくれて、「明日も来てね」と言ってくれた。とても嬉しくて、次の日、お礼に折り紙で鶴を折って渡すとすごく喜んでくれて、とても仲良くなった。 英語が通じるわけではないけど、心が通じ合えてとても嬉しかった。 一中略 授業や寮でたくさん話しかけてくれて、自分ももっと話そうと思って、日本やインドのこと、ヒンディー語などたくさん話ができて楽しかった。 (下線部筆者)

村の学校では「英語が通じなくても心が通じ合える体験をした」と生徒 H は語った。村の学校では英語教育が十分に実施されていない状況が見られた。インドでは連邦政府が公的 共通語としてヒンディー語と英語が設定されている。近代の経済的な発展により中流階級が 増加し、英語で学業を受けさせるなどのことが広がりつつあるが、農村部ではまだまだ英語 教育が十分に行われておらず、日常会話程度も話すのが難しい状況があった。そのような中 でも生徒は「心が通じ合えてとても嬉しかった」と心が通うような経験を通して、交流の意 義を感じることになったのではないかと思われる。

また、パスウェイズでは授業中は英語で会話が行われているが、寮での生活はヒンディー語が使用される状況が伺える。しかしながらインドでは英語習得のために日常会話も英語を使うケースが増えてきている状況も見られ、英語使用の拡大によりヒンディー語の使用機会が減ってきているという状況があり、言語状況については今後の調査が必要であると考えられる。また、生徒 H は交流の手段としてヒンディー語による会話を楽しんだという経験を語るなど、知らない言葉を知ることの楽しさが、記述に表れていると見受けられる。

次に生徒 M は以下のように自身の言語に関する気づきを語った。

インドに行くまでは<u>自分の英語力に全く自信がなかった</u>が、現地でできた友達や先生、ガイドのシンさんと沢山会話を交わすことで、<u>自信を持つことができた</u>。逆に、<u>言いたいことがうまく伝わらないことも多々あり、その悔しさから、もっと頑張ろうというモチベーションも得られた。</u>(下線部筆者)

インド滞在中に、自身の周りの人との会話を積極的に行うことで、話ができたという経験が自信につながっている状況が読み取れる。一方で、うまく伝わらなかった時もあったようだが、その時も「もっと頑張ろうというモチベーション」につながっている状況がみられた。インド滞在の特別な環境で、英語による会話ができた時だけでなく、できなかった時も今後の英語の学習につながる経験になっているということが読み取れる。

【インドの人に対するイメージ】

インドの人に対するイメージについて、以下のように生徒 R は気づきを語った。

観光をしたり、pathways の人たちとかかわっていくうえで、インドの人たちは初対面の人にも積極的であることがわかりました。交流の場であるという前提があったうえで、向こうの人は日本人より<u>もより仲良くしようという意思があらわになっていて関わりやすい</u>と感じました。あまり話さなかった人からも気さくなあいさつをされ、フランクな印象がありました。自分がもしpathwaysの人の立場で、外国人を歓迎するとしたら、礼儀正しくしようと堅くなりがちなので、もうすこし歓迎する気持ちが相手に伝わるようopen-mindedになる必要があると感じました。(下線部筆者)

インドの人に対する気づきとして、「初対面の人にも積極的」で日本人よりも「仲良くしようという意思があらわになっていて関わりやすい」と感じたようである。「あまり話さなかった人からも挨拶された」という経験もあり、自身の歓迎する際の振る舞いについて見直す機会につながっていることが伺える。

また、インドの人に対するイメージの変化について生徒 E は以下のように語った。

パスウェイズの学校が意外と溶け込みやすく、もっとインドの映画や英語のドラマ、音楽を見ておくべきだったなと思いました。インドという国は私にとって疎遠な存在で全く想像がつかない国だったけれど日本との共通点も多数あり、そこにいる人たちも接しやすい方たちで感激した。また、インドの人たちは多様性を本格的に取り入れていて、宗教への価値観が柔軟で受け入れることができていて素晴らしいなと思った。日本ではそもそもに関心のない人が多いように感じる。インドに限らない話であるが、日本人は自分とは無関係の人とは関わらないようにするという風潮があるように思える。それとくらべ、海外のひとたちは多くの人と少しでもコネクションがあり、それらを大事にしているように思える。(下線部筆者)

「学校へ溶け込みやすかった」という語りから、インドの「接しやすい」人柄が、学校の 受容感につながっていると推測される。また、「宗教への価値観が柔軟」と語り、「日本人は 無関係の人とは関わらない」など、インドの状況を見て自身の文化を見直すような過程が見られた。また、先述した生徒 R のインドの人の気さくさとも関連するが、インドの人は「多くの人とコネクションがありそれらを大事にしている」というような気づきが得られた。

【パスウェイズに対するイメージ】

パスウェイズの学校に対するイメージについて生徒 M は以下のように語った。

授業には自分が普段いる環境と比べて断然活気があり、生徒が積極的に意見したりクラスメイトとコミュニケーションをとったりしている様子が見られた。さらに、寮に滞在する中で、大変な課題やテスト勉強をこなしながらも学校での生活を心から楽しんでいる学生たちの姿を目の当たりにした。同じIB校でもこんなに違うものかとある意味ショックのようなものを受けたが、自分も彼らを見習い、もっと向上心を持って学びに取り組んでいかなければ、と触発され、IB生として残り1年弱頑張ろうと思った。(下線部筆者)

授業中の活動について生徒 M は「生徒が積極的に意見」している様子を述べ、「課題やテスト勉強をこなしながらも楽しんでいる」学生の姿を目の当たりにして「ショックのようなものを受けた」と語った。自分のいる環境と他の環境が異なって見えるということはよくあることかもしれないが、同じ IB プログラムをやっているということが、異なる環境で学ぶ学生から触発されて、生徒のモチベーションにつながっているという可能性が伺える記述がみられた。

また、生徒Rは以下のようにパスウェイズの印象を捉えた。

インドの街並みなどを実際に見ていて、日本よりも広く、pathways の校内はきれいな印象があった反面、 道路や村に入ると、ゴミが落ちていて、汚い印象がありました。pathways にいる間、日本の掃除の文化 について共有するべきという案が挙げられていて、確かに、身の回りに気を使い、自分の手で掃除を行う という日本の学校の習慣を共有するのは良い意見だと思いました。次回の活動では、こういった日本独自 の良い習慣や文化を共有すると、よりよい国際協力/文化交流になると思いました。 生徒の語りからは、「pathways の校内はきれい」である一方で、「道路や村はゴミが落ちていて、汚い」という印象を持ったことが分かる。このことを踏まえて生徒 R は「日本の掃除の文化」に触れ、「日本独自の良い習慣や文化」を共有することが国際協力につながるのではないかという考察をしている。今回のプログラムは単にインドの IB 認定校を訪問するだけでなく、村の学校で国際協力を実施するという活動もあったことから、このように国際協力とつなげて考察することができたのではないかと思われる。

3. 2. 大学生の感じた成長や気づき

大学生も先述した村の学校やパスウェイズでの授業に参加したが、特別に実施した授業実 践の部分に特化して振り返り記述について考察を行う。

【数学授業実践について】

数学授業実践を経て学生 A は以下のように回答した。

英語で授業をすること、その準備の大変さを学び、改めて授業することの大変さを感じた。<u>普段全く英語に関わることがない中での準備は本当に困難ばかり</u>であったが、一つひとつを解消する中で自分自身に成長が見られ、挑戦して本当によかったと感じている。一中略 授業の一コマをいただき、実践をさせていただいた。生徒の学びに向かう姿勢や教室の環境は日本のそれと似た雰囲気を感じた。しかし、机の配置の自由度やコンピュータの活用など違いが見られ授業に集中するための雰囲気や環境がより整えられていると感じた。(下線部筆者)

学生 A は英語で授業をするにあたり、「英語で授業をすること、その準備の大変さを学んだ」と回答し、表 2 のとおり 8 回 (8 時間 30 分) の事前準備を行っただけでなく、個別でもスライドを作成するなど、一回の授業に向けて多くの時間を割き、準備にあたった。普段英語に関わることがなく、より負荷を感じた可能性があるが、その分準備に時間と労力をかけて取り組んだことが伺える。日本語を母語とする学生が、IB 教員養成プログラムの実習として英語で授業することのメリットとして、負荷がある分それを乗り越えるために細かいところまで注意は払って授業を作ることにつながるということが挙げられるのではないかと推測される。加えて、「一つひとつを解消する中で自分自身に成長した」と回答するなど、8回の事前準備の中で一つひとつ成長しながら授業実施につながっていることが分かる。

また、「生徒の学びに向かう姿勢や教室の環境は日本のそれと似た雰囲気であった」という語りからは、教師として教壇に立ち、インド生徒の学ぶ姿勢を直接感じ取ることができたからこそ得られた気づきであり、日本国内での実習では実現しにくいことであると思われる。

4 総合考察と結語

本稿では高校生と大学生がインド渡航により、どのようなプログラムを経験し成長したか

について、生徒・学生の記述から考察を行った。以下にプログラム実施により得られた示唆 について考察する。

第一に、高校生の得た学びについて、生徒は言語的な側面からは、英語だけでなくヒンディー語での交流についても充実感を得ている状況が見られた。また、英語を話そうと挑戦することにより、伝わった時もそうでない時も異なる形でモチベーションにつながっているという記述が得られた。また、インド人に対するイメージからは「積極的に話をしてくれる人達で、人間関係を大切にしている」という印象が語られ、日本と対比して自国文化を捉え直す過程が見られた。また、パスウェイズに対するイメージからは、授業中も積極的に発言し、生活も楽しんでいるという印象が語られ、そのことに生徒が触発されているような記述がみられた。さらに村のゴミ処理環境と日本の状況を踏まえて、国際協力としてできることについて検討した生徒もいた。

第二に、大学生の得た学びについて、学生の数学授業実践に関する記述からは、英語で授業をすることが多くの準備の機会につながり、その段階で成長していると感じている状況が記述からみられた。また、インドの人を対象にした授業を実施したとことによる、海外実習の特徴的な記述も見られ、インドをはじめ、海外で授業実践を行うことの意義について今後検討する必要があることが示唆された。

本稿では、高校生・大学生の記述の事例を取り上げて考察したもので、一般化して議論することはできないと考える。しかしながら、今後「国際協力」「IB」といったことをテーマとした海外渡航を行う際の参考事例となりうると考えられる。今後、IB のつながりを活用して高校生や大学生の成長の機会につながるようなプログラムの有効性を学術的な視点からも分析していく必要があるであろう。

参考文献

- ・国際バカロレア機構(2014)『国際バカロレア(IBの教育とは?)』国際バカロレア機構.
- 文部科学省 (2023) 『文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムホームページ』
 (https://ibconsortium.mext.go.jp/IB-japan/authorization/)(2023 年 5 月 1 日閲覧)
- ・国際バカロレア機構(2023)" IB university directory", IBO.

 (https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/professional-development/pdfs/
 universities-at-a-glance-university-directory-2023.pdf)(2023 年 5 月 1 日閲覧)

岡山理科大学でのドイツ語教育を振り返って

岡山理科大学 教育推進機構基盤教育センター 三木 恒治

私が岡山理科大学にドイツ語教員として採用されたのは、今から36年前の昭和62年の4 月のことである。次年度の1月には平成に元号が変わっているので、「昭和の理大」を知る わずかな現役教員となったわけである。当時の理大は大学としての形を整え、成長を遂げて ゆく上昇期であった。旧来の理学部に加え前年には工学部が新設され、同じころ河野先生の 主導で教養教育を担当する教員組織である教養部(教養部会の発展形で、私はここに配属さ れた)も発足した。もちろんまだまだ総合大学には程遠く、学舎も山間にまばらに点在する 程度であった。それから 30 有余年、現在では八学部体制(今治キャンパスの獣医学部を含 む)を取り、教育学部や経営学部など文系の学部も併設する堂々たる総合大学である。山の 頂きのみならず谷間まで白亜の建造物が埋め尽くし、あたかも難攻不落の城郭であるかの外 観を呈している。さらに中腹まで路線バスが運行し、そこからエスカレーターで正門にたど り着くことができる。 裏手の東門にもバスターミナルが置かれ、こちらの方は谷間の C-1 号 館のエレベーターで楽に上まで行くことができる。かつての理大名物である「地獄坂」「マ ムシ坂」「留年坂」という坂道の呼称を耳にすることも今ではほとんどなくなり、息を切ら しながら急坂を登る学生の姿もあまり見かけなくなった。そのせいか、1限目の講義で学生 が遅刻してぞろぞろと入室する光景も減った気がする。インフラの利便性は格段高まり、昭 和の頃と比べるとまさに「隔世の感あり」なのだが、月日が経つのは早いもので、来年の 3 月には私自身定年退職を迎える年齢となった。奇しくも今回、私にとって理大での出発点で ある教養部時代の先輩にあたる小山先生にお声がけをいただき、筆を執ることとなった。

私が赴任した頃は、理大での初修外国語(第2外国語)の科目選択肢はドイツ語とフランス語しかなく、9割ほどの学生がドイツ語を履修していた。理大でドイツ語を学ぶことはいわば「常識」とされていた。理大のみならず、一般的に大学ではそうした傾向が大勢を占めていた。歴史を紐解けば、日本が近代化を推進するにあたって、明治維新期の先進文明地域だった西欧の文化を採り入れることは新政府の急務であった。中でも当時プロイセンという領邦国家を母体として統一国家を実現したドイツ帝国は勢力拡張期の真っ只中にあり、法律や議会制度など多方面で近代日本のグランドデザインの模範となった。そしてドイツ語は医学、哲学など学問の主要分野で不可欠の言語であった。単にコミュニケーションツールとし

てだけでなく、そこに包含されている観念、論理体系を消化吸収することによって日本は先 進諸国への仲間入りを果たせたといっても過言ではないだろう。そして、戦前の旧制高校で は基幹科目としてドイツ語が幅を利かせ、その伝統は戦後学制が変わっても大学の教養教育 の中で連綿と受け継がれてきた。反面、私たちの学生時代には、ドイツ語が進級の壁になる ケースが多々あった。特に理系の学生の場合ハードルが高かったようで、20年ほど前のこ とになるが、日本人ノーベル賞受賞者の一人が回顧談で、学生時代にドイツ語の単位が取得 できなかったがために留年の憂き目にあったことを告白して話題になったこともあった。か つては 「撃墜王」 の上位には必ずと言いていいほどドイツ語教員が数多く名を連ねていたも ので、一般教養課程の敵役で嫌われ者でもあった。裏を返せばドイツ語受講者が多かったこ との証でもある。本学でも以前は初級文法全般が必修指定なのは無論のこと、文学作品や自 然科学の読み物まで中級で扱っていた。 ドイツリート (歌曲) の歌詞やサッカーの雑誌を携 えて質問にやってくる熱心な受講生もいたものだ。それも今は昔の話と化し、近年ではアジ アの近隣諸国の言語が重要視される趨勢にある。大学大綱化以降新たに導入された中国語や ハングルに圧倒され、ドイツ語履修者は初修外国語全体の2割弱ほどに落ち込んでいるとい うのが偽らざる現状だ。しかも必修科目の学習範囲は、初級文法の前半部分に限定されてい る。大方のドイツ語不要論者に言わせると、英語を除く西欧の言語は既にその役割を終えた ということらしい。ただ、ドイツ語教員の立場としては、「時代遅れの言葉になった」の一 言で済ませることはできないし、易々とドイツ語の灯を絶やすわけにはいかない。ドイツ語 は本当に大学教育において必要性が減じたのであろうか。この場を借りて、ドイツ語を学習 する意義について私なりの提言をさせていただきたい。

ドイツ語が公用語として使われているのは、ドイツ連邦共和国(人口約8340万)、オーストリア共和国(同890万)、スイス連邦(同870万)、リヒテンシュタイン公国(同30万)の4か国である。このうちスイスではフランス語、イタリア語、レトロマン語も併用されており、ドイツ語人口は全体の四分の三ほどである。つまり、ドイツ語人口は総計すると一億弱といったところである。日本は人口約1億2千4百万人であるし、アジアでは中国やインドは言うに及ばず、1億以上の大国は珍しくはない。ところが、この数字はヨーロッパではロシア語に次いで2番目なのである。私たちがヨーロッパの大国としてすぐに思い浮かべるイギリスやフランスですら6000万余り、イタリアが5000万、スペインが4000万ほどであるし、ロシアがヨーロッパだけでなく中央アジアにも広く版図が及んでいることを考えれば、ドイツが人口規模ではヨーロッパーの大国と言って間違いない。しかも、ドイツ語圏はほぼヨーロッパの中央部分に位置しており、経済的には明らかにEU(欧州連合)をリードしている。確かに世界全体で考えると、英語やスペイン語、フランス語は海外植民地支配

の長い歴史もあり、使用人口はかなりの数に上るメジャーな言語である。しかも、ビジネス 産業ではかなりの割合で英語が通用し、コミュニケーションの手段として重宝されているこ とは否定できない。しかし、少なくともヨーロッパ地域に限定して見れば、地勢的状況も含 めてドイツ語がトップクラスの中枢言語であることは紛れもない事実である。ドイツ語の初 学者に向けてのガイダンスで、まず私はこのことを紹介し、学習の主要モチベーションの一 つとしている。

次に大学に入って英語以外の言葉に触れることがどういう意味を持つかという視点から、 ドイツ語学習の効用を考えてみたい。本来、語学というのは実用の側面だけではなく、学問 のノーハウとしても非常に重要であるために、大学で必修科目として設定されているという 経緯があることを忘れてはなるまい。高校までは大半の生徒にとって、英語が唯一の外国語 であった。私たちの頃(筆者は昭和 31 年生まれである)は中学校で英語を学び始めたが、 今の学生は小学校高学年から英語に馴染んでいる。年代によって多少学びの期間の違いはあ るにしても、外国語イコール英語なのは言うまでもない。そして、少年期のかなりの期間に わたって英語を当たり前の外国語として受容しているわけである。これが案外、人が陥りや すい盲点を生み出す罠なのである。人は誰しも最初に出会ったものをノーマルなものだと考 えがちだが、この先入観こそが物事の正しい理解を妨げている側面があるのだ。そもそも、 他の言語を知らずして英語がどんな外国語なのかがきちんと理解できるはずがないだろう。 もちろん、現代社会において英語が世界共通言語である側面を否定するつもりはないのだが、 実のところ英語はヨーロッパの言語の中では非常に例外的な言葉なのである。例えば、英語 に入る前に、普通は小学校でローマ字を習うものだが、それが横文字の字体になれることに は役立つにしても、こと発音に関しては全く英語では通用しないことに戸惑いを覚えた方も 多いだろう。それどころか、英語ではアルファベットの A を覚えたところで、A には 5 通 りくらいの音があって、発音の大原則であるはずのアルファベットすら大して手助けとはな らなかったのではないだろうか。ところが、英語やフランス語以外のヨーロッパの言葉の母 音は基本ローマ字読みということになっている。(イギリスとフランスは古くから交流が活 発で、お互いに言語のルールを消しあったとみられる。)ローマ字を学んだ後、英語ではな くドイツ語を勉強するほうが学習効率的には理にかなっているのかもしれない。文法に目を 向けると、英語は欧米の言語で名詞に文法上の性の区別がない唯一の言語である。また、名 詞や冠詞が文の中の役割に応じて特に変化するわけではない。一方ドイツ語は名詞が男性、 女性、中性と三つの性を持ち、名詞や冠詞にも複雑な格変化がある。また、英語は動詞の人 称変化も三単現(三人称単数の動詞現在形)のSくらい注意しておけば事足り、他のケース では原形がほぼオールマイティに使える。それに対して、英語以外の言語は人称に応じてほ

ぼ全面的に動詞が変化する。つまるところ、英語はいろんなルールを取り払った合理的で実 践的な言葉となっているのである。

言葉は日常の中で使用される生ものなのだから、杓子定規な原理、原則の枠を超えるのは 当然の理で、英語には人の出入りが激しく海外進出に積極的だったイギリスの歴史が凝縮さ れていると思われる。一方、ドイツ語にはドイツ人の規範を重んじるという国民性、統一が 遅れ内向き志向だったドイツの歴史が反映されている部分が窺われる。同じゲルマン系言語 でありながら、英語とドイツ語はたどってきた道のりが異なり、似て非なる対照的な言葉と なっている点は興味深い。実用性という点では英語は確かに重視されてしかるべきであろう。 むしろ文法の規則が忠実に順守されているドイツ語の方が、言葉のありようを考えた時レア ケースなのかもしれない。言葉の本流がいずこにあるのかは一概には規定できない難問であ るし、ここで論じるべき命題ではない。ただ、私たちは英語が欧米言語のメインストリーム だという刷り込みを高校までの英語教育で知らずして与えられて、ほとんど感覚的に英語を 学んできたのは確かである。低年齢で学び始めるほど、その刷り込みは強固なものとなる。 理屈では説明できない面が多いものほど低年齢で身に着ける方が現実に即しているし、それ 相応の実効性もあったかもしれない。しかし大学での語学教育を実用というレベルだけで捉 えるのは、あまりにも寂しい。言葉の仕組み、成り立ちなどにも思いを馳せてほしいし、そ のためにも他の言語の学習が必要となってくるのだ。英語の特殊性は英語以外の言語を学ぶ ことによってはじめて認識できるのである。そのことに気付くだけでも、第2外国語を学ぶ 意味があるというものだ。英語を学び始める少年期は、左脳の論理的思考を司る部分が未発 達で、言葉の仕組みにまで頭をめぐらすには時期的に早すぎたかもしれないが、大学で第2 外国語を学ぶ学齢は、個人差はあるにせよ物事を論理的、体系的に捉えてゆく絶好のタイミ ングに当たるのである。第2外国語を履修する者は、そのことを強く念頭においてほしい。 そうした比較対照の視点が必要なことは、語学のみならず学問全般にわたる普遍的な真理で ある。特に自然科学は、事象の類似点、相違点を分類、分析し、その本質を探るという作業 の上に成り立っている。二つの外国語を習得することは、まさに学問の基本的な方法論を身 に着けることに通底しているのである。語学教員としてだけでなく、大学人の良識からもこ のことは声を大にして強調しておきたいポイントだ。

非常勤講師の時代も含めると、私のドイツ語教員歴は今年でちょうど 40 年目になる。齢こそ重ねてきたが、「日暮れて道遠し」でまだまだやり残してきたことばかりというのが正直な気持ちである。授業方法についても未だに試行錯誤の連続で、自分なりに創意工夫は心がけてはいるものの、教え方の技術が若い頃に比べてさほど向上したわけでもない。それで

も、大学教育のあり方に対する思いは年月を経るごとに強まっているという実感がある。何より、ドイツ語の需要が今後どう推移してゆくのかは大いに気になるところだ。「グローバリゼーション」の標語が各方面で叫ばれて久しいが、内実は「英語一極グローバル」の方向性を取っており、バランスの取れた「多言語グローバル」とは言い難い。世界のグローバル化の本来の理想像に近づくという観点からも、第2外国語の学習を通じての言語の本質の正しい理解が必要なのではないだろうか。最後の一年間、もう一度原点に立ち返り、ドイツ語を大学教育の中でいかに位置づけできるかをしっかりと見定めておきたいと思う。



【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第97号では小山悦司所長、木村光宏氏、三木恒治氏の3編のエッセイを掲載しました。小山所長は「遠きところを近く見、近きところを遠く見る」と題して、武蔵の『五輪書』「水之巻」に記されている至言を用いて、わが国がこれから少子化対策に取り組むための姿勢を述べています。木村氏は「大学生と高校生によるインドにおける国際教育プログラム実践」と題して、IB認定校の高校生がインドのIB認定校の生徒たちと企画・実施した国際協力プロジェクトとIB教員養成プログラムの学生がその生徒たちに実施した授業活動を通して得られた成果について報告しています。また三木氏は「岡山理科大学でのドイツ語教育を振り返って」と題して、岡山理科大学でドイツ語を教えてきた中で、ドイツ語に対する学生の意識が大きく変化し、英語を重要視するようになっているが、ヨーロッパにおけるドイツ語圏、ドイツ語の構造等の特徴を説明してドイツ語を学習する意義について述べています。

今回掲載しました3編は視点こそ異なりますが、現在の大学教育をより充実したものにするための提言等が示されています。その意味で、3編とも興味を持って読んで頂けるものと確信しています。(T.A.)

編集・発行:国際教育研究所 〒710-0821 倉敷市川西町11-30 加計国際学術交流センター内

TEL (086) 423-1611 (代)

URL: https://www.kake.ac.jp/iie/

e-mail: iie@edu.kake.ac.jp